

李 唯親  
LI Weiqin



沈淪  
紙本着彩

## 沈淪

植物を観察し描くことは、目に見えない心理や観念を表現するアプローチであり、自己に対する深い洞察の機会を提供してくれる。植物の変化を通じて、人間の複雑な感情や抽象的な悩みをどのように表現できるだろうか。植物の持つ生命力や変容は、人間の内面の複雑さと共鳴するに違いない。

本作品『沈淪』には植物の美しさや新鮮さだけでなく、それらが時間とともに変化し、終わりを迎えることを描きこんだ。植物は傷ついたとしても特別な反応を示すことをしない。言うまでもなく、植物は人間のように声をあげて他者に助けを求めたりしない。それらは、地に根を張ったままで傷を癒す。だから、私は、植物を描くことを通して、力強い生命力を画面に表現したいと思った。さらに、枯れた花は、生命の一時的な美しさや短い命、人間の命の儚さを象徴している。

鴉の姿に私の感じている孤独感を投影させ、その目を通して植物の様子を観察しているように描いた。植物同士が支え合っている様子から信頼感が感じられる。自然には、感情があると私は考えている。だから、植物と私は感情によって結ばれることができると思う。植物も動物も私にとっては特別な存在である。

枯れた植物を描く際、私は、葉や花の部分に硫黄酸化させた銀箔を用いた。私は、この技法を用いて、時間の流れのなかで植物が枯れることを、銀箔の酸化で変化した色調で暗示した。日本画には伝統的な技法が数多くあり、そのことが絵画のもつ造形的な言語の拡張性を大幅に向上させ、また作品の表現力と美的価値を高めると考えている。自分の思いを作品に融合していくため、日本画の多様な素材とその特性を使いこなし、実践することを通して独自の技法を模索した。

植物を具象的に描くとき、心の現れていない画面では単なる説明になるだろう。だから着想の折に、自分の心の部分をどんなふうに扱うか、それを常に念頭に置きながら描かなければならない。